

【報告】

・【第8回 CIEC サタデーカフェ】

テーマ：学校教育でのクリティカルシンキング 教科教育、生活指導、プロジェクト(総合)

開催日：2021年12月18日(土)20:00-21:00

開催形態：ZOOMによるオンライン開催

主催：小中高部会

・【第9回 CIEC サタデーカフェ】

テーマ：町の高校生が考える地域の魅力化～地域学「浜中学」から考えること～

開催日：2022年1月15日(土)20:00-21:00

開催形態：ZOOMによるオンライン開催

主催：小中高部会

・【第10回 CIEC サタデーカフェ】

テーマ：ICTの3文字の中で大切なのはどれでしょう？

開催日：2022年2月19日(土)20:00-21:00

開催形態：ZOOMによるオンライン開催

主催：小中高部会

・【第11回 CIEC サタデーカフェ】

テーマ：デマ・フェイクニュース・ディスインフォメーションそしてネタ

開催日：2022年4月16日(土) 20:00-21:00

開催形態：ZOOMによるオンライン開催

主催：小中高部会

【第8回 CIEC サタデーカフェ】**【開催概要】**

開催日：2021年12月18日(土)20:00-21:00

スピーカー：若林靖永氏 (CIEC 会長・京都大学経営管理
大学院経営研究センター長)

テーマ：学校教育でのクリティカルシンキング 教科教育、
生活指導、プロジェクト(総合)

会場：Zoomによるオンライン開催

プログラム：20:00-20:15【話題提供】

20:15-21:00 【フロアとのフリーディスカッション】

第8回 CIEC サタデーカフェは「クリティカルシンキング」をテーマに CIEC 会長である若林靖永氏による話題提供でした。クリティカルシンキングについて、世間ではすでに様々なところで実践されており、例えば、情報収集や情報評価もクリティカルシンキングなら、しっかりと構成されたアウトプットや相手に対して思っていることが伝わっているか、また、その相手の言っていることが理解できるかなどもクリティカルシンキングであると考えられ

る。しかし、クリティカルシンキングの能力を高めるためにどのようなことがなされているか、とえば、日本はまだ海外には及ばないし、バカロレア教育が行われているフランスではより厚みのある教育が行われている。そこで、若林氏は、「教育のための TOC」というツールを用いてクリティカルシンキング能力を高める実践をされており、発表や実践を中心とした初年度ゼミの学生にも取り入れておられる。若林氏が見学された小学校でも、SDG's を考える取り組みの中でこれらのツールが応用されている小学4年生での様子も報告された。子どもたちが、友達のことやと未来について考え、相手を思いやり、SDG's について自分の言葉で発表するツールとして TOC を用い、クリティカルシンキングを実践されているという話題提供でした。

その後、フロアとのフリーディスカッションとなり、クリティカルシンキングに関するいろいろな話題が出されました。紹介のあった小学校の先生も参加いただいております。「ロイノート」の思考ツールを使用しているが、それを使

うことが目的になってしまっている事があり、それではダメということ、付箋と模造紙でクリティカルシンキングに取り組んだ。小4でも十分に対応でき、なぜならばという考え方を身につけることが大切だと考えている。」と述べられた。子どもたちが他人の意見に対して批判的思考をもとに発言することは難しいのではないかとという質問には、「批判的と捉えると言いにくくなるので、ツッコミを入れるよう促している。関西の学校でもあり、ツッコミという発言しやすくなる傾向があるようだ。実際は小6の生徒から小4の子たちにツッコミを入れてもらったりすると、抵抗感も少ないようだ。間違いの指摘ではなくツッコミという感覚を大事にしている。」というお話だった。また、この取り組みをされる前後での比較においては、「子どもたちの会話に、なぜならばという言葉がよく現れるようになった。この状況は、結構早い段階で現れている。」ときちんと言えることが大事であり、その効果が現れているようだ。さらに、TOCは大学院生でも小学生でも使えるツールであり、年齢に応じて自分たちができることについて、しっかりと考えさせることの大切さや、対面での豊かなコミュニケーションを意図的に創出することの大切さ等も語られた。最後に、「まともに考えることを教える教育こそ、クリティカルシンキングである。」という話も出され、クリティカルシンキングは、これまで行われてこなかったわけではないが、今までやってきていることを自覚して組み込んでいけば評価できるものであり、より自覚的に実践し、より自覚的に教育していくことが大切である、とまとめられた。

年度末ということもあり15名の参加でしたが、毎日カリキュラムに追われ、やらないといけないとわかりながらなかなか実践にまで達していなかった我々にとっては、改めて考えさせられる非常に有意義な1時間となりました。年内はこれで最後になりますが、4月から始めたサタデーカフェも第8回を数えるまでに成長し、毎回ご参加いただける先生もおられ、大変嬉しく思います。今後も、さまざまな分野でご活躍の方に話題提供をいただけるよう検討を進めたいと思います。今回の話題提供者であるCIEC会長の若林氏を始め、枚方市立東香里小学校の磯西先生、森先生、その他ご参加頂いた方々にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。(文責：平田義隆)

【第9回CIECサタデーカフェ】

【開催概要】

開催日：2022年1月15日(土)20:00-21:00

会場：Zoomによるオンライン開催

プログラム

20:00-20:15【話題提供】

スピーカー：石谷正氏（北海道霧多布高等学校校長）

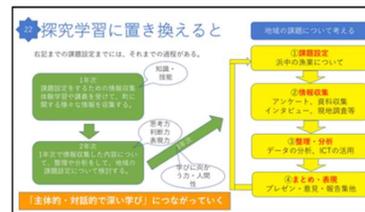
テーマ：町の高校生が考える地域の魅力化～地域学「浜中学」から考えること～

20:15-21:00【フロアとのフリーディスカッション】



第9回CIECサタデーカフェは「町の高校生が考える地域の魅力化」をテーマに北海道霧多布高等学校校長の石谷正氏による話題提供でスタートしました。霧多布高校は北海道の東側、釧路から70km以上離れた浜中町にある高校です。浜中町の人口は約5500人で、ハーゲンダッツの原材料生産地であり、ルパン三世の生みの親であるモンキー・パンチ氏の出身地です。町では、近年、人口減少が大きく、若年層の流出や高齢化の加速などが問題となっており、町を支える若年層の育成が急務だそうです。そこで、町立高校である石谷氏の学校で、地域学(浜中学：はまなかがく)を実施することで、自律的で持続的な社会を創出し、生徒の自己実現に寄与することができる高校づくりを推進、また学校自体が、生徒から選ばれる魅力ある学校へと進化することで入学者数が増加し、次代の地域の担い手の創出につなげる取り組みを行っているそうです。浜中学は、1年生では、見学や体験中心の活動を行うことで「浜中を知る」ことを行います。2年生では、課題発見を行い、調査実習や社会調査などのスキルを学ぶ「浜中を調べる」活動を行います。更に3年生では、町長や議員、地域住民に3年間の研究成果の発表を中心に行う「浜中を広める」活動が行われています。3年間の大きなプロジェクトですが、関わる教員は基本的には裏方で、生徒たちの力で進めます。教員も経験5年未満の若手の先生が多く、教えるというよりも一緒に学ぶという姿勢で進められています。この活動を通して、生徒たちが学び合い育ち合い、地域への愛着や誇りを生んでいく役割を担っているそうです。

話題提供のあと、フロアの方々のディスカッションを行いました。そこではまず、霧多布高校についての質問がありました。石谷氏からは、「本当は経験豊富な教員に来てほしいが、なかなか難しい現状があり、若手の教員が多い。この問題は北海道の地方部ではどこでも抱えている問題なのではないか。」という話があり、それに対してフロアからは、「逆に若手の先生が多いと、新しいことにも取り組みやすくなるのではないですか？」という話も出されました。また、ICT活用に関わる話も出ましたが、霧多布高校では、スマートフォンの使用は学校内ではさせておらず、光回線も一部の地域でしか来ていないそうです。町としてはそのあたりのインフラの整備も今後の課題だということでした。ただ、生徒たちはGIGAスクール構想の影響もあり、どんどんスキルは高まっており、浜中町の小学生が普通にPowerPointでプレゼンを行う姿を石谷氏はすでに目にしているようです。また、浜中町についての話も出され、これまでから、住みやすいまちづくりに力を入れており、小中高の給食の無償化や、スクールバスの運行、霧多布高校生の国内外視察旅行の費用援助など、積極的に町内の子どもの支援する施策を取り入れ、町を上げて子どもたちを育てている姿勢が伺えるようです。北海道内や東京などの首都圏からのIターン移住者も多く、「この町で育った子が、また町に帰ってきて活躍してくれることを願っているのです。」という話もありました。地元の良さをきちんと知り、町を大切にしていって子どもたちを育てていくことの大切さを改めて考え



させられるカフェとなりました。

今回は13名の参加でしたが、学校教育として必要なことを認識し直す非常に有意義な1時間でした。今回の話題提供者である石谷氏を始め、ご参加頂いた方々にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。(文責：平田義隆)

【第10回 CIEC サタデーカフェ】

【開催概要】

開催日：2022年2月19日(土) 20:00-21:00

会場：Zoomによるオンライン開催

プログラム：20:00-20:15 【話題提供】

スピーカー：伊藤正徳氏（聖徳学園中学高等学校校長）

テーマ：「ICTの3文字の中で大切なのはどれでしょう？」

20:15-21:00 【参加者とのフリーディスカッション】

ICTの3文字
の中で大切なのはどれでしょうか？

第10回 CIEC サタデーカフェは「ICTの3文字の中で大切なのはどれでしょう？」をテーマに聖徳学園中学高等学校校長の伊藤正徳氏による話題提供でスタートしました。結論から言えば、伊藤氏はICTの3文字の中ではCであるCommunication(コミュニケーション)を最も大切にされているそう。聖徳学園中高では、2015年にiPadを導入して以来、現在ではBYODでICT支援員を2名、ITチューターを4名を擁する学校としてSTEAM教育及びGLOBAL教育に力を入れておられます。そんな中で生徒たちはiPadをフル活用して教育活動に取り組んでいます。当然、教員も学級通信や面談・添削指導などに活用し、保護者にも積極的に関わっていただく取り組みも盛んです。またiPadを使いながら生徒同士で教え合うなどの互いに支え合う役割もあり、学校生活では必要不可欠なものになっているとのこと。伊藤氏は、「使うことがゴールではなく進化することが大切」とおっしゃいます。「ただ答えるだけでなく、正解のない問いに答えるための力をつけてほしい。そのためにも、先生から生徒へのツールだけではもったいない。」とも言われ、生徒を中心に、教員や保護者ともうまく連携したコミュニケーションを大切にされているというお話でした。

話題提供のあと、参加者とのディスカッションを行いました。質問がいくつか出され、例えば、複数サービスを利用することについては、逆に1つのサービスだけで運用すると、それが止まってしまうと何もできないので、そういったリスクヘッジを考えているという答えだったり、教員研修についての質問では、やることはしっかりやるが、最初からパーフェクトは目指さず、徐々にできるようになるようフォローしていく体制を整えるなど、きめ細かな対応があちこちに見える答えが印象的でした。また、現役高校生(聖徳学園高校2年生)も参加しており、質問は伊藤氏から彼へシフトし、高校生としてiPadをどのように活用しているのか、使用頻度についてはどうか、また、あふれる情報をどのように処理しているのかなどという質問が出されました。彼からは、iPadを使わない授業はなく、毎時間使用しており、日常生活ではiPhoneよりもiPadがない方が困るという答えで、情報も相当あふれているが、うま

くミュートをかけて、自分に必要な情報をきちんとキャッチできるよう取捨選択を行っているそうです。そのようなやり取りをしているうちに今回は時間切れ。提供いただいた話題も盛りだくさんでしたので、またの機会を設けてもいいのではないかと感じるほどでした。

今回は21名の参加で、とても盛り上がりました。その中でも印象的だったのは、校長先生はじめ、教員2名、および現役高校生1名も一緒に参加の中、非常に雰囲気よく会話が進んでいて、お互いに対する敬意や信頼を非常に強く感じました。校長先生も常に現場に向き合っておられ、これからますます進化しそうな、とても良い雰囲気がありました。多くの学校ではまだまだ1人1台の機器を使うことに注力しており、活用することも大変ですが、聖徳学園中高では、すでに、機器があることは当たり前で、「何のためにその機器を使うのか？」ということにシフトしているのだと拝察しました。今後の1人1台環境を見据え、コミュニケーションの大切さを改めて考える非常に有意義な1時間でした。今回の話題提供者である伊藤氏を始め、ご参加頂いた方々にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。(文責：平田義隆)



【第11回 CIEC サタデーカフェ】

【開催概要】

開催日：2022年4月16日(土)20:00-21:00

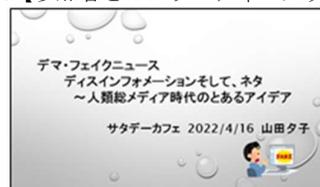
会場：Zoomによるオンライン開催

プログラム：20:00-20:15 【話題提供】

スピーカー：山田夕子氏（社会医療法人愛仁会）

テーマ：「デマ・フェイクニュース・ディスインフォメーションそしてネタ」

20:15-21:00 【参加者とのフリーディスカッション】



第11回 CIEC サタデーカフェは「デマ・フェイクニュース・ディスインフォメーションそしてネタ」をテーマに社会医療法人愛仁会の山田夕子氏による話題提供でスタートしました。テーマにある「デマ」「フェイクニュース」「ディスインフォメーション」「ネタ」の違いを理解されている方はどのくらいおられるでしょうか。今回はその説明から始まりました。山田氏によると、「デマ」は元は政治家や権力者が発信した偽情報をさし、今は雑な偽情報を意味することが多いとのこと。「フェイクニュース」は意図的に作り込まれた偽情報。「ディスインフォメーション」は偽情報を使う目的のことでサイバー攻撃の一種。「ネタ」は見破られることが前提となっている偽情報のことであると話されました。こういった偽情報を見破る方法はいろいろありますが、デマは正しい知識を持っていることで見破ることができることも多く、フェイクニュースは誰に対して、

何のために、また流す側には何のメリットがあるのかということを考えることでも見破ることはできることが多いそうです。より確実に見破るためには、一次情報にあたることも大切ですが、それでも真偽を判断することは難しく、世の中には公式偽情報も存在します。確かさを求めるにはデジタル的に検証することも必要で、電子署名やハッシュ値を調べることも、また、偽サイトをドメイン名で調べる方法もあり、引用についてもそれを特定できる可能性があるそうです。カギになるのは情報リテラシーやニュースリテラシーを身につけることで、自分のリテラシーを過信しないことが重要です。必要なのは、真偽を問うための糸口にはどのようなものがあるかを考えること、と山田氏は締めくくられました。

話題提供のあと、参加者とのディスカッションを行いました。そもそも、デマ・フェイクニュース・ディスインフォメーションを意識して区別したことがないところから始まり、実際は大きな違いは感じられないが、これらの違いをきちんと考えている発信者も多くいるということでした。また逆に何も考えずに情報を発信してしまうことで、周りの人たちに迷惑をかけることも紹介されました。そういったディスカッションから、話題は情報の真偽の見破り方に移りました。現在は、情報発信が容易になり発信者の数も増加したことから、真偽を見破ることもさらに難しくなっており、一次情報を見極める方法も有効だが、一次情報が正しいと言い切れない場合もあるとのこと。ウクライナのニュースのように、それが現実に起こったときのコストパフォーマンスを判断の参考にすることも有効であると言う話題も出ました。情報の真偽を見極めることは困難ではありますが、1人1人が得た情報を、正しく納得した上で次に発信していくことが大切で、最後に山田氏が『『考える歯車になる』という考え方が大切です。』とおっしゃったことが印象的でした。

今回は8名の参加で少人数ではありましたが、改めて深く考えさせられる話題でした。CIECでは情報モラルや情報の真偽に見極め方などについてのお話を伺う機会は少なく、貴重なサタデーカフェとなりました。今回の話題提供者である山田氏を始め、ご参加頂いた方々にこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。(文責：平田義隆)

